地域安全学会の旅
Tourism of Institute of Social Security Science

井出　明[1]
Akira IDE[1]

[1] 追手門学院大学　経営学部
Department of Managemant, OtemonGakuin Unisecity

For the last ten years, the Institute of Social Security Science has been conducting excursions related to natural disasters during spring conferences every year. However, there is evidence of plenty of “traces of grief” that have nothing to do with natural disasters. Moreover, natural disasters often have profound effects on weak people, who are forced to live as social outcasts as a result of modernization. In this paper, tourism points that are shadow of modernization are recommended for scholars about natural disasters especially in terms of dark tourism to recognize various aspects of grief about the Great East Japan earthquake.

Keywords *: tourism , dark tourism, the Great East Japan earthquake, philosophy*

１．安全の対象

科学哲学者である村上陽一郎は、危険の種類を 2 つに分けている。一つは、いわゆる自然災害であり、これは、地震や台風といった太古から存在する危険である。もう一つは、科学文明の進展にともなって新たに出現した危険であり、こちらは、フロンガスや核エネルギーと言ったもの例として挙げている。村上によれば、後者は、本来は便利になると思って創りだされたものの、結果的に人間を危険に追い込むという逆説を見せることがあると述べる。いわば人間の“浅知恵”が創りだした危険であるとともに、近年急速にその危険性が拡大してきていると指摘している。

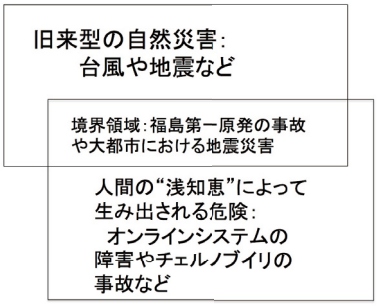

図１：近代における危険の構造

この 2 つの危険の関係は二律背反ではなく、高層ビルが地震によって崩れることで大量の死者が発生したり、東日本大震災で実際に見られたように津波が原子力発電所を暴走させるなど、従来から存在した危険が発現した時に、新しい危険が大規模に顕になるという構造を見せることもある（図 1）。

筆者としては、これらの危険に加えて、社会的な危険が第三の危険として拡大してきている点について指摘しておきたい。換言すれば、我々のコミュニティや社会システムが何らかの契機によって崩壊する可能性があることを強調しておきたいのである。それは、いわゆる、民族問題や同和問題といった歴史的に前近代から引きずるタイプの社会の機能不全もあるが、科学技術の高度化や統治機構の複雑化にともなって生じた新しい問題がその多くを占める。これは具体的には、水俣病に関する補償金をめぐる地域コミュニティの崩壊や福島の原子力災害をめぐる各種の差別的な取り扱いなどを指している（図 2）。

安全について語る場合は、この 3 テゴリーについて、重畳的に取り扱うべきであり、実際、本学会は人文・社会科学の観点からも危険や安全について考察を深めてきた。

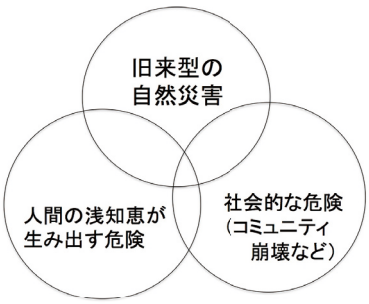

図 2:近代における危険の三類型

２．ダークツーリズムの対象

ダークツーリズムとは、戦争や災害といった人類の悲劇の跡をめぐる旅であるが、欧米ではツーリズムの一形態として広く知られた考え方である。日本では、東浩紀らによる『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』が出版されて以降、急速にこの考え方が広まりつつある。地域安全学会は、ここ 10 年ほど、春の大会を自然災害に縁のある地域で開催してきた。この学会の最終日には、巡検がセットになっているが、これは学会が意識していたか否かはさておき、これはダークツーリズムの典型例である。但し、巡検は自然災害の爪痕を重視しており、科学文明の高度化にともなって拡大するタイプの危険や社会システムの機能不全に関連するタイプの危険についてはこれまであまり顧みられてこなかった。観光学におけるダークツーリズムの手法は、安全学とは異なった危険へのアプローチが可能である。ダークツーリズムの観点から、これまでの巡検の場の近くで補充的に調査した結果と今後の可能性について記しておく。

３．各論

3.1. 三宅島

もちろん火山災害の現場であることは間違いないが、この島は、流刑地としての歴史を持つとともに、封建制度における刑罰の本質を考える上で多くの示唆を来訪者に与えるポテンシャルを有している。また、基地受け入れ闘争に関して、それが地域コミュティをどのように変容させたのかという点についても、来訪者に大きな啓発を与える可能性がある。

3.2.　いわき

福島の復興は、原子力災害からの復興にほかならない。したがって、これから先、地域安全学会の大会やワークショップが開かれるにしても、巡検において原子力災害を扱わないことは、安全に関する学会として妥当な姿勢とは言えないであろう。今後、積極的にこの度の原発事故と対峙するような巡検が企画されることを願ってやまない。

3.3.　雲仙

雲仙普賢岳は火山災害の例として知られているが、平成新山から少し南に下ったところには、口之津歴史資料館があり、ここには日本で唯一と言って良いからゆきさんの資料の展示がある。長崎県立歴史博物館を始めとして、各自治体は明治期の人身売買の資料を集めていないが、一見の価値があろう。

４．終わりに

3.の各論であげた場は、悲しみについて考えるための一例であることはもちろんである。強調しておきたいのは、自然災害の現場の近くには、防災研究者があまり意識してこなかった地域の悲しみが存在することがままあるという点である。そしてその悲しみは、近代化、産業化、文明化の中で、弱い人に対するしわ寄せによって生じてしまうこともある。この種の悲しみは、自然災害の影響を相対的に強く受ける弱者の内実を知る上でも十分に認識されるべきであるし、災害に対する理解を深める上でも研究の対象になりうると考える。

参考文献

村上陽一郎『安全学』(1998)青土社
井出明「チェルノブイリから世界へ」東浩紀編『チェルノブイリ・ダークツーリズムガイド』(2013)ゲンロン

謝辞

本研究の経費の一部は、科学研究費基盤研究（C）「東日本大震災後の観光地の現状と復興に関する研究 (研究代表　麻生 憲一)」、科学研究費基盤研究（C）「日本型ダークツーリズムの確立と東北の復興を目指して（研究代表者　井出明）」および日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金「悲しみの承継とダークツーリズム（研究代表者　井出明）」によって賄われている。

(2014.9.15.投稿)